日本語史から見た語彙と表現 ―若者言葉「エモい」を中心に―

Vocabulary and expressions in the history of Japanese language
―focusing on teen slang *emoi*―

馬　場　　治（人間科学部こども学科教授）
Hajimu BABA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

若者言葉「エモい」〔形容詞ク活用〕は、現代社会におけるSNS（Social Networking Service）の利用によって世代的には若者の間で流行し、急速に普及した。三省堂辞書を編む人が選ぶ「今年の新語２０１６」に選ばれ、「日本語では、『四角な→四角い』『黄色の→黄色い』というように、『特別ではなく普通の日本語の一員になった』と感じられる場合、形容詞化が起こることがあります。ただ、外来語が形容詞化することは大変少なく、１９７０年代末の『ナウい』、現在の『エロい』『グロい』ぐらいしか例がありません。『エモい』は稀な例と言えます。『エモい』は、感動・寂しさ・懐かしさなど、漠然としたいろいろな感情表現に使われます。」との選評がある。そこで、小稿では当該語における語構成のメカニズムを検証し、母語である不易の大和言葉の語彙と語用を踏まえ、史的に変遷してもなお、通底する美的感情や哲学的文化的な背景も視野に入れ、位相語で新造語の当該語について考察する。

〈キーワード〉
語彙　語用　語構成　位相語　新造語

はじめに

令和二年秋、新入生研修の会場で、学生たちがスマートフォンで撮った夕焼けの写真をインスタグラムに載せて見せ合い、「これ、エモくない？」「うん、エモいよね！」と会話しているのを偶々耳にした。その時「エモい」という言葉を初めて聞いた筆者は思わず、「エモいって、どういう意味？」と尋ねた。すると、「『映え』がして、みんなが『いいね』と感じる時に使います。意味は、何となく美しく雰囲気のあるものを指します」との返事だった。どうやら、多くの若者が心に響く美的な対象に何となく価値観の共有を見出し、共感した際に用いられる常套語らしい。正に、emotional〔形容詞〕感情的かつ広義に用いられる俗語である。俗語という術語の定義には「俗語とは、話しことばの中で公の場、改まった場などでは使えない（使いにくい）、語形・意味・用法・語源・使用者などの点が、荒い・汚い・強い・幼稚・リズミカル・卑猥・下品・俗っぽい・くだけた・侮った・おおげさ・軽い・ふざけた・誤ったなどと意識される語や言い回しを指す。多くの場合、改まった場で使う同意語またはそれに準じる表現を持っている。主な候補語に若者語・業界用語・隠語・卑語・流行語・差別語の大部分あるいは一部分がある。また一般語の口

頭語形がある。」[1]といった記述がある。いま令和四年一月発行の国語辞典で意味や由来を確認すれば、「エモ・い《形》〔俗〕心がゆさぶられる感じだ。『冬って―よね』〔『エモな気持ち』のように言う〕由来ロックの一種エモ〔↑エモーショナルハードコア〕の曲調から、二〇一〇年代後半に一般に広まった。古語の『あはれなり』の意味に似ている。派-さ。（三省堂 国語辞典 第八版）とある。

右の記述から「エモい」は、共時的には社会言語学的な位相（性別・地域・年齢・職業などの違いにより、用いる言葉が違うこと。また、話者の社会的属性だけでなく、場面や相手が違うことにより、用いる言葉が違うことも含む）において、俗語＞話し言葉＞若者語の語彙範疇や座標で考察すべき語であることが知られる。

一　日本語史から見た若者言葉「エモい」の位置

「エモい」の意味は、中古に入って成立した古語「あはれなり」と似ているとの指摘から辞典で確認すると、三〔形動ナリ〕「強く心に感じた状態を形容する語。きわめて多方面に用いられる。」❶かわいい。いとしい。恋しい。なつかしい。❷感心だ。じょうずだ。尊い。❸ありがたい。❹趣がある。ステキだ。オモシロイ。❺すまない。気の毒だ。❻残念だ。悲しい。といった具合（新明解 古語辞典 第三版）で、当時から感情的かつ広義に用いられる語であったことが分かる。しかし、当時の主な話者は貴族層だから、通時的な位相としては俗語でなく雅語と言えよう。更に、ものに感動して自然に発する声に起源を持つ感動詞「あはれ」からの派生語だから、品詞の種類が異なる。ただ、語用では上代・中古でもその表現領域がかなり広く、対象に向かって主観的に感情を移入した際に催す、感慨・人情・情趣といったニュアンスを包括する性質がある点は共通している。対義語「をかし」は対象を客観的に把握しようとする。いま同じ主旨の文脈における両語の使い分けを探ると、吉田兼好『徒然草』第十九段「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ。……六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも、あはれなり。六月祓、またをかし。」（季節の移り変わりこそ、何事につけても味わい深いものだ。……六月、みすぼらしい荒ら屋に夕顔の花が白く見え隠れする陰で、燻された蚊取り線香の煙がゆらゆら揺れているのは、趣深く郷愁を誘う。六月の晦日に水辺で氏神様に汚れた世間を掃除してもらう夏越しの祓え儀式は、不思議で面白い。）といった例文を挙げられる。鎌倉・南北朝時代の歌人・随筆家である兼好の、下級公家からの隠遁生活によって季節の移ろいを観察する焦点は、卑近な日常（褻）と神聖な祭祀（晴）とで相違し、それが両語の使い分けに反映されものと思われる。

一方、ロックの一種エモ（エモーショナルハードコア）の曲調を由来とする説を確認すると、「『エモい』という表現の起源は、おおむね１９９０年代～２０００年代の音楽シーンにあるといえる。当時は『エモ』（emo）と呼ばれる音楽ジャンルに連なる曲風であることを『エモい』と表現していた。音楽ジャンルとしての『エモ』は、ハードコアパンク系の演奏とメロディアスかつ感情をぶつけるような曲・詩世界によって主に特徴づけられる音楽ジャンルである。」（Weblio 辞書＞実用日本語表現辞典）といった記述を見出せる。１９９０年代は、デジタル情報を記録したＣＤ（Compact Disc）の売上げが盛んだった頃である。アナログからデジタルへの移行期でもある。

この新造語の意味や語用については、「『エモい』とは、『感動的だ・感情が揺さぶられる・心が動かされる・情緒を感じる・趣がある・グッとくる』というような説明の難しい感情を表現する意味で用いられる言い方である。若者言葉であり、基本的にはポジティブな表現である。『エモい』は英語の emotional（エモーショナル）に由来する省略表現である。語尾に『い』が付くことで形容詞として機能しており、『超エモい』のような叙述、『エモいシチュ』のような修飾、『エモかった』のような活用を可能にしている。」（Weblio 辞書＞新語時事用語辞典）といった解説がある。ロックの英語歌詞と旋律が流行に敏感な若者のスラングで「エモ」と総称され、語用の場面が広がり、使用の頻度が高まって、ほとんど由来は意識されなくなった。

中世の兼好は、いかにも和風の歳時や環境からの複合的な刺激を身体感覚で把握し言語化したが、現代の若者は、和洋折衷が浸透した文化的な環境で、文明の利器たる電子媒体による映像や音声を身体感覚で同期させて言語化した。日本語史から見た風情の受容、及び相対化した事象を言葉で評価する過程での感情表現の相違が読み取れる。当時当所における対象に催した割り切れない曖昧な感興は、「あはれなり」「エモい」と表現すれば、取り敢えず日本語を話して意思疎通をする言語共同体の構成員である読者や仲間に空気として伝わり、共感を得ることができたろう。

小稿では、歴史や文化の流れから見た動態的な言語事象を扱うので、「由緒正しい日本語か、乱れた日本語か」といった規範や秩序に照らした価値判断は行わない。

二　「エモい」の語構成と語用論

形容詞「エモい」の語構成は、カタカナ外来語の省略形エモ（語幹）＋活用語尾「い」で三音節ある。〈要旨〉に挙げた「エロい」「グロい」と同系統の語彙である。活用形を示せば、次のようになろう。主部が共通の例文も挙げて対応させる。

未然	連用	終止	連体	仮定	命令
――かろ	――かっ ――く	――い	――い	――けれ	×

例　夕暮れに海辺を散策する若者が郷愁（ノスタルジー）を誘う景色を眺めるシチュエーション。

未然　水平線に沈む夕日は、エモかろう。＊推量の助動詞「う」に連なって言い切る。

連用　水平線に沈む夕日は、エモかった。＊過去の助動詞「た」に連なって言い切る。
エモくなる。＊自動詞五段活用「なる」に連なって言い切る。

終止　水平線に沈む夕日は、エモい。＊直後に終止の句点が入って言い切る。

連体　水平線に沈む夕日は、エモいことがある。＊形式名詞「こと」等に連なる。

仮定　水平線に沈む夕日がエモければ、写メる。＊仮定の接続助詞「ば」に連なる。

語幹　水平線に沈む夕日がエモ。＊語幹で言い切り、感嘆や余韻を言外に表す。

いまカタカナ外来語を語幹とする「ナウい」を例に語構成のメカニズムを探ってみると、「日本語に移入された外国語、すなわち外来語は、日本語の音韻体系の許容範囲内で発音されることが普通である。つまり日本語化し日本語として使われるのである。」「表記は片仮名をもっぱら用いるが、片仮名自身も日本語の音韻体系を反映したものである。造語法も、『オープンする、ダブる、ナウい』等、日本語の方式に頼っている。」(2)との指摘が参考になる。但し、語幹ナウは省略形ではない。カタカナ外来語を誘い込んだ形容詞として「英語nowを形容詞化させた『ナウい』は、現代的な感覚で新しい意を担って、一九八〇年代の流行語となりました。中島梓『にんげん動物園』に見る『深田祐介さんのは、ナウい女性ばっかし。』（六三）などです。そして、現在、いっそう多くの人々の必須語となっています。ただ、そのnowは、形容詞化以前に、形容動詞化していたように思えてなりません。連体形『ナウな話』『ナウな事例』などと言っている生（なま）の声が耳底に残っているように思えてなりません。一般的な傾向として、カタカナ外来語は形容動詞として活用語化します。『モダンな服装』『スマートな体つき』などです。『ナウい』が直ちに成立したとは、どうしても思えないのです。実際、そのとおりで、『ナウ（な）』は、一九七〇年代の流行語となっていました。」(3)との探究に注意しなければならない。

同じ語構成で美醜を評価する形容詞「エロい」「グロい」は、erotic（愛欲的）・grotesque（怪奇的）を省略した名詞のエロ・グロを語幹としている。昭和初期のモダニズムにおける低俗で退廃的な風潮や文化現象はエロ・グロ・ナンセンスと呼ばれ、三語が一セットで流行語となっていた。革新的だが、反社会的な傾向も強かった。

なぜ省略形になるかについては、英語と日本語でも現代は一般に省略（語）の形成および使用が多く、その要因としては「時間短縮・エネルギー短縮・情報の高密度化」「使いこなし感」といった指摘があり、社会学的に分析して「時代の流れが速すぎるために、世代差による社会の分断も激しくなってきており、その程度を表わす指標として省略（語）の多用が認められる」(4)という。右の例文では在来の形容動詞「きれい」「すてき」でも言い換え可能だが、形容詞「エモい」を使う話者（集団）が若者だと区別する指標（もちろん一旦言葉を知ってしまえば、若者を装った老人でも使用可能だが）となっている。「使いこなし感」とは、日常会話やSNSで頻用する俗語で標準的な日本語のような堅苦しさのない、気の置けない同年代の仲間へのくだけた表現だからこそだ。現代の若者に好まれる要件が「楽で早い」ことを考えれば、即時の通信に優れるSNSとの親和性も高く、短くテンポのよい「三音節・省略形」であることにも納得がゆく。それぞれ意味の異なる「エモい」「エロい」「グロい」だが、二音節目が音素/o/となっており、高低アクセントの起伏式も低高低の中高型で共通する点は注意される。

三　感情形容詞の体系から見た「エモい」

ここでは、感情形容詞の体系から「エモい」を俯瞰しておきたい。まず形容詞は、属性形容詞（客観的な性質・状態の表現をなすもの）と感情形容詞（主観的な感覚・感情の表現をなすもの）の二つに区別し、分類基準とできるという。また後者については、「感情や感覚を表わす形容詞が述語になる場合、その感情・感覚の主体を表わす主語になるのは、感情や感覚をもちうる有情のもの、主として人であることはいうまでもない。」（主語の制限）、「感情や感覚には、対象の存在するのが原則である。感覚の対象は現前する外的な刺激であるのが普通であろう。しかし、感情は現前する対象だけでなく、遠い所のできごとの想像

や、過去のことの記憶や、未来の予想など、その対象になるものは広汎である。」（対象語）との考究がある[5]。人間が持っている基本的な四つの感情は喜怒哀楽に分類される。各感情に対応する基礎語はA「うれしい」、B「いまいましい」、C「かなしい」、D「たのしい」である。本能的な心的属性の快（正）と不快（負）に大別すれば、前者がAとD、後者がBとCとなる。「うれしい」は「かなしい」とは対義語、「たのしい」とは類義語の関係にある。語用と意味に関しては、「うれしい」は、あるいいできごとがあったときに使う。「たのしい」は、自分もそれに参加して、心が明るくなるときに使う。との区別がある。また「いまいましい」は、腹だたしくて、しゃくにさわる感じだ。「かなしい」は、心が痛み、泣きたくなる気持ち（にさせるようす）だ、といった解説文（前出の国語辞典）が目安となる。いま目安に即して、大学生の若者を想定した一人称代名詞「私（わたし）」を共通の主語とした学生生活にありがちなシチュエーションの例文を、次のように考えてみた。

A　私は、受験勉強の末に第一志望の難関大学に合格できて、うれしい（嬉しい）。
B　私は、部活の練習方法に難癖をつける嫌味な奴（やつ）が、いまいましい（忌々しい）。
C　私は、つまらぬことで好きな彼女と喧嘩別れしてしまい、かなしい（悲しい）。
D　私は、大学の音楽仲間と吹奏楽のサークル活動ができて、たのしい（楽しい）。

対象語について、Aは自分の才能や努力が及ぶか及ばぬかの目標が存在する事象、Bは敵対的な相手が存在する事象、Cは男女交際の相手が存在する事象、Dは友好的な相手が存在する事象である。Aの「受験勉強の末に」の表現を「家族から応援されて」等にすれば、相手が存在することになる。相手の種類は話し手の内（うち）と外（そと）に分かれ、外だとBの「奴」のような罵り表現にもなる。また、言い切る文末の述語から名詞の修飾へ言い換えると、「うれしい合格」「いまいましい野郎」「かなしい喧嘩別れ」「たのしいサークル活動」となる。名詞を修飾する際に「～い」の形になるので「イ形容詞」とも呼ばれる。つまり、単独で話し手の主観的な感情を表す述語となったり、語順交替で連体修飾となったりできる。「夕日は、エモい」と「エモい夕日」も成立するので、「イ形容詞」の性質は通底していると言えよう。

遡って、大野晋編『古典基礎語辞典』（角川学芸出版、平成23年10月）で古語の意味用法も確認しておくと、次のとおりである。例文は適した一つを選び絞った

（なお、筆者が日本語史からの観点や意味の弁別に重要だと考えた箇所には傍線を引き、小学館新編日本古典文学全集による〔口語訳〕を補足した）。

A　うれ・し【嬉し】形シク

解説　ウラ（心）イシ（良し）の約（uraisi→ure-si）。欠乏していたものが補われ満たされたとき、あるいは、願望していたことがかなったとき、反射的に感得されるはればれとした感情。気にかかっていたことが、よいほうに結着したり、失せものが見つかったりというときなどに、瞬間的に、すっきりと晴れる気持ちよいさま。また、好むものを得られたときの幸福感をいう。類義語タノシ（楽し）は欲望が果たされて持続的に満足を感じるさま。

語釈　反射的に気持ちがはればれとするさま。気が晴れて心地よい。▼「新しき年の始めに思ふどちい群れて居ればうれしく〔宇礼之久〕もあるか」〈万葉 四二八四〉。〔新しい　年の初めに　仲間たちで　集まっていると　うれしいね〕

B　いまいま・し【忌ま忌まし】形シク

解説　動詞イム（忌む、マ四）の派生語。死の穢れに触れている、不吉である、また、それらに触れてはならないと感じるさま。そのことに関連して生じる何か不吉なことを避けようとする気持ちをいう。中世以降には、自分ではどうすることもできない受け入れがたいことに対する嫌悪の情も表すようになった。

語釈　③しゃくに障るさま。いやな感じだ。▼「あないまいまし。打手の大将軍の矢ひとつだにも射ずして、にげのぼり給ふうたてしさよ」〈平家 五・五節之沙汰〉。〔まあいやらしい。討手の大将軍が、矢一筋さえも射ないで、都へ逃げ帰ってしまわれたなんて、情けないこと〕

C　かなし【悲し・哀し・愛し】形シク

解説　カナシは、…することができない意を添える接尾語カヌと同根。愛着するものを、死や別れなどで喪失するときのなすすべのない気持ち。別れる相手に対して、何の有効な働きかけもしえないときの無力の自覚に発する感情。また、子供や恋人を喪失するかもしれないという恐れを底流として、これ以上の愛情表現は不能だという自分の無力を感じて、いっそうその対象をせつなく大切にいとおしむ気持ちをいう。自然の風景や物事のあまりのみごとさ・ありがたさなどに、自分の無力が痛感されるばかりにせつに心打たれる気持ちをもいう。

語釈　①悲しい。せつない。現代の「かなしい」と基本的に同じである。▼「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかり〔加奈之可利〕けり」〈万葉

四

七九三〉。〔世の中は　空しいものだと　思い知った今こそ　いよいよ益々　悲しく思われることです〕※「会者定離」「世間虚仮、唯仏是真」といった仏教思想の影響。

D　たのし【楽し】形シク

解説 欲望が満ち足りて心地よい感覚をもつさま。上代では、遊興の場や酒食を伴う歓楽の場面で用いられることが多く、飲食が思うまま十分に足りて心地よいことをいう。後に物質的に充足していることを基に、（物質に保証されて）安楽である、安定している、何不自由ない、という意味に転じた。タノシは古くはもっぱら和歌に用いられ、その後も散文では和漢混交文に用いられ、平安女流文学にはほとんど用例がない。

語釈 ①満ち足りて心地よい。歓楽の気分をいう。宴席に用いられることが多い。

▼「毎年（としの）に春の来らば斯くしこそ梅を挿頭（かざ）して楽しく〔多努之久〕飲まめ」〈万葉　八三三〉。〔年ごとに　春が来たなら　こうやって　梅を髪に挿して　楽しく遊び飲みましょう〕

例文ACDは現代語では四音節だが、古語では三音節である。やはり瞬間的な情動の発露には三音節の韻律が適していたのではないか。また、万葉歌なので作者は題詞や左注から知られる。Aは大膳大夫道祖王、Cは太宰帥大伴卿（大伴宿禰旅人）、Dは大令史野氏宿奈麻呂、である。いずれも貴族・官僚・歌人といった位相であり、和歌は社会的な評価基準となるメディアかつコミュニケーションの手段でもあった。現代の若者がSNSで会話することは、画像と文字で意思疎通を図るという手段こそ異なるが、スマホという情報端末を所有し物質的に充足している位相を前提に、集団や趣味を同じくする仲間同士が束の間の充足感や幸福感を催す場面での情動を宴的即興的に共有するという点では通底していよう。ちなみに、短歌は五・七・五という音数律をもつが、「エモくない？」「うんエモい！」「これ、エモくない？」「うん、エモいよね！」といった会話での短句も五音節または七音節である。

Bは嫌悪と立腹、Cは喪失と不幸といった対極にある感情であり、カタカナ語幹の形容詞を求めるなら、「ウザい」「キモい」「ヤバい」系の曖昧表現だが、古語には抗い難い厳しい現実体験が伴っている。「エモい」は快（正）での語用が優勢のようだが、「彼女と喧嘩別れしてしまってから、ずっと落ち込んでいてエモい（悲しい・辛い・切ない）気持ちになった」といった不快（負）での語用も可能である。すなわち、「エモい」は「怒」を除く「喜哀楽」の範疇で用いられる形容詞である。

四　「エモい」と表現される対象と共有する美的感情

「エモい」が包含する感情の核心は懐古や郷愁である。若者の知見や体験に基づく感傷や情緒である。この特徴を代表的な例文から考察してみたい[6]。なお、筆者が時間表現には傍線、「エモい」感情を催す契機となった対象には波線を引く。

例文1　人生初めての山登りをすることになって当日も乗り気ではなく、重い足取りで始まった登山であったが、頂上に到着して目にした景色は、絶景であった。なんとも言えない気持ちに心が動かされ、この景色はエモいと思った。

例文2　放課後の校舎、だれもいない教室で写真を撮ると窓から見える夕暮れと普段とは一味違う教室のもの寂しさにエモいと感じた。

例文3　夏休みの長期休暇に実家に帰省した際に、久しぶりに自分が学生だった頃のアルバムを見返していると旧友とのエモい写真がでてきた。

例文4　いい曲がないかと様々なアーティストの曲を聴いているとエモい曲を見つけた。

例文5　大人になってから昔に友人と遊んだ後よく通る道を自転車で通った時に、あの頃の情景を思い出していた。あたりの匂いはどこか懐かしさを漂わせ、エモく感じた。

右は、いずれも個人的で主体的な感情の発露である。時間的には、現在の非日常だと雄大な山岳風景、過去の日常だと懐かしい学生時代の思い出の品や情景を対象としており、可愛く見栄えのするカラフルなスイーツやファッションなどは選ばれていない。奇を衒うことなく、レトロなアナログ文化の範疇である。また、前節の例文A「思ふどち〔仲間たち〕」に相当する他者「旧友」「友人」も見られる。偶然にしろ、意図的にしろ、見出した対象について連帯感を抱きたい他者へ承認欲求によって「エモくない？」と発信し、「うんエモい！」と承認の返信をもらえれば、共感が成立し、自己肯定感も生まれよう。「エモい」対象を見出す美的感情に加え、シェアリングできる「分かってくれ、認めてくれる」相手の存在が必要なのである。

美的感情とは「美意識における感情。人が対象に美的に反応した時、美的直観によってそれを観照するのに対し、内発的に触発されて起こる心の動き」であり、元

となる美意識とは「美に関する意識。美しさを創造・受容する心の働き。また、何をもって美しいかをきめる基準や考え」（小学館 精選版 日本国語大辞典）である。「美しい」という概念を漢字から探ると、《形》❶うまい（甘）。❷色や形、声などがきれいなさま。❸りっぱな。よい。（三省堂 全訳 漢辞海 第四版）である。最古の部首別漢字字典である後漢・許慎『説文解字』によれば、「羊」＋「大」の二字で構成される「会意文字」であり、神事の際に犠牲とされた動物である「大きな羊」が字源なのだが、嘱目の具体物に対する評語としての語用が広がり、姿形・色彩・音調などが整っていて快く感じられるものを「美」という抽象概念で把握する頻度が高まると、由来は意識されなくなった。国語「美しい」の類語は「きれい」だが、日常会話レベルの話し言葉での使用頻度が高い。「汚濁のない清潔なさま」の意味で「きれいな水」と語用するように、「美」のニュアンスが「エモい」とは相違するので、同じく瞬発力の高い三音節であっても言い換え難いのだろう。では、「人間にとって『美』とは何か」と哲学的な問いを発すると、まず人間にとって理想的な普遍妥当の最高価値たる「真善美」（認識・倫理・審美）の一つである。次に「美」は人間によって見出され認知される概念である。夕焼けや夕日を見て情動し、「エモい」と表現する根本には「美しい」と感じる心が存在する。その「美しさ」は懐古や郷愁を誘い、温もりや切なさが綯い交ぜとなった複雑な感情を即時の主体的な意志によりイ形容詞「エモい」で言い切れば、「俺は夕日を見て心を揺さぶられたんだ」との事象表明となり、仲間の承認と共感が得られる。古今東西の言語は異なれど、「美」に触発された感情の発露と表現に至るメカニズムは通底している。

近世国学者の本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』で「さて物語は、物のあはれをしるを、むねとはしたるに、そのすぢにいたりては、儒仏の教には、そむける事もおほきぞかし、そはまづ人の情の、物に感ずる事には、善悪邪正さまゞゝある中に、ことわりにたがへる事には、感ずまじきわざなれども、情は、我ながらわが心にもまかせぬことありて、おのづからしのびがたきふし有て、感ずることあるもの也。」(7)と評論した。現代の若者は「あはれ」とは言わないが、自然や人事を体験し、琴線に触れた場面で直観的に心を揺さぶられ、「エモい」と感じる仕組みも同じではなかろうか。脳内には過去の体験（直接的か間接的か自分事か他人事かは問わず）で知覚し印象に残った記憶が潜在しており、その記憶が例文のような現前の対象の刺激によって再生される。Z世代の若者にとって、その抑えきれぬ気持ちを瞬間的に言語化する際に「エモい」は、改まって「美しい」と言わずとも、しっくりときて最適なのだろう。各自の「エモい」に纏わる物語や文脈は千差万別だが、後続組が脳内検索の情報処理により「エモい」価値観を共有すれば、精神的な充足感も齎されると考える。

五　今後の課題と展望

若者言葉「エモい」は、包括的で使い勝手がよいといった長所がある。だが反面、それは短所でもある。なぜなら、人情の機微を弁え、微妙なニュアンスを伝える必要に迫られた場合に大まか過ぎるからだ。何故どのように「エモい」のか、詳しく説明できるだけの語彙力や文章力は培っておくべきだろう。例えば、清少納言が『枕草子』第一段で「秋は夕暮。夕日花やかにさして山ぎはいと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど、飛び行くさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など。」と情景描写したように、夕焼けを「エモい」と感じる視覚や聴覚に訴え掛ける景物の構成要素を列挙し、「黄昏時の茜色や松籟」等と総合評価できれば、親密な情趣の交歓や意思の疎通が可能となり、知己との絆も一層深まるだろう。

注

(1) 米川明彦編『日本俗語大辞典』（東京堂出版 平成15年11月）の俗語概説。
(2) 日本語教育指導参考書16「外来語の形成とその教育」（国立国語研究所、平成2年3月）Ⅰ はじめに
(3) 中村幸弘『日本語の形容詞たち』（右文書院、令和3年5月）アプローチ85。
(4) 堀田隆一 hellog～英語史ブログ #3329.なぜ現代は省略（語）が多いのか？ 2018-06-08 http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2018-06-08-1.html 参照。
(5) 国立国語研究所『形容詞の意味・用法の記述的研究』（秀英出版、昭和47年3月）第1部　形容詞の意味の諸側面　1．感情形容詞と属性形容詞
(6) 言葉の手帳ホーム＞流行語＞「エモい」の使い方や意味、例文や類義語を徹底解説！ 2021年6月6日 https://www.tutitatu.com/ 参照。
(7) 大野晋編『本居宣長全集』第四巻（筑摩書房、昭和44年10月）198頁。